

## 「色」を詠み込んだ秋の句に学ぶ

今瀬 一博

前回まで、色を詠み込んだ「夏の句」の鑑賞を通して、色の効果的な詠み方や、色を詠み込む面白さについて述べてきました。今回は季節に合わせて、色を詠み込んだ「秋の句」を紹介します。

秋の作品を色に注目して読んでみて、特定の色が多く詠まれている印象を受けました。目に付くのが「白」。次いで「赤」、「黒」を詠んだ句が多かったと思います。ですから今回は、「白」を詠み込んだ句から順に、「赤」、「黒」を詠んだ句を取り上げて、その効果を季節との関係で述べていきたいと思います。

そもそも「白」と「秋」は縁の深い言葉です。「白秋」といいますが、「白」は五行説に定めた秋の色ですし、「白帝」とは秋を司る神のこと、「素秋」の「素」は「白」の意です。ですから「白秋」「白帝」「白露」等の季語を詠み込まずとも、感覚的にも「白」を用いた秋の句が多いのは、自然なことなのでしょう。

以前、「かなしみ」の象徴としての「白」を詠んだ、「かなしみはしんじつ白し夕遍路 野見山朱鳥」や、「孤独」の象徴としての「白」を詠んだ、「鷗らは腹白かりき俊寛忌 北光星」等の春の句を紹介しました。また「白」との対比が美しい「ざぶざぶと白壁洗ふわか葉かな 小林一茶」や、自然の畏ろしさを感じた「海の紺白く剥ぎつつ土用波 瀧春一」等の夏の句を読みました。し

かし次に挙げる「白」を詠み込んだ「秋」の句は、これまで紹介した句のような「象徴性」は感じませんし「明確な対比」によって色を際立たせる詠み方もしていません。言うならば、「白々とした大きな秋の空気の中で句が詠まれている」と言えます。

新涼や白きてのひらあしのうら

川端 茅舎

「新涼」は、立秋を過ぎて夏とは違うしみじみとした涼しさを感じる。掲句は「てのひら」「あしのうら」まで「白き」と詠み、新涼が体全体を覆っている印象を受けます。夏の涼しさとは違う初秋の白々とした涼しさが体全体に及ぶようです。

秋めくや肌白かりし母のこと

飯田 龍太

この句は周囲の気配から秋の訪れを感じ取る「秋めく」が季語ですが、何の関連もない「肌白かりし母のこと」が自ずと思いつかれたのは、白々とした大きな秋の気配ゆえでしょう。

秋の雲しろじろとして夜に入りし

飯田 蛇笏

掲句も、空の高いところにある「秋の雲」が、白はそのままに夜に入ったという内容です。「しろじろ」は実際の色以上に、大きな秋の気配をまざまざと感ぜさせてくれると思います。

ひるがへり雀白しや初あらし

山口 青邨

「初あらし」は、初秋に吹く台風期の前触れのような強い風。「初あらし」に染め出された「雀」を「白し」と断定し、この鳥のしたたかさを感じさせます。秋という季節に吹く「初あらし」ゆえに、雀の「白」が印象深く目に残ったように思います。

露なめて白猫いよよ白くなる

能村登四郎

「秋」ゆえでしょうか。この句の中でも「白」は動きません。「(白)露」を舐めても無論「白猫」は白くなりません。にもかかわらず「いよよ白くなる」に納得がいくのは、「秋」と「白」

の繋がりや登四郎も読者も感覚的に分かっているからです。

白妙の菊の枕を縫ひ上げし 杉田 久女

「菊の枕」は、邪気を払い安眠の効果もあるといえます。この句も「秋」を代表する「菊」の効果、「秋」と「白」の縁の深さによって「白妙」が動きません。この言葉の効果で、菊の香が漂い、乾いた花弁の音も聞こえ、めでたさも引き立つのでしょうか。

ただいま紹介した「白」を詠み込んだ「秋」の句は、「秋」とも縁の深い「白」のもつ清らかさ、透明感、涼やかさが句の底にあつて、一句を支えているように思います。そしてその「白」が背景にあつて、様々な色の微妙な味わいがより強く印象づけられるように思います。では次に、そのような視点から「赤」や「黒」を詠み込んだ「秋」の作品を鑑賞してみましよう。

秋風やむしりたがりし赤い花 小林 一茶

幼くして死んだ長女を偲んで詠んだ作品です。「秋風」の透明な世界や大きな「秋」の「白」を背景に、「赤い花」がより鮮明に見えます。作品の成立事情を知ると悲しみも際立ちます。

唐辛子 筵 四枚 赫 赫と 飯島 晴子

「赫」は「赤」と同義ですが、燃え上がる火のような赤をいいます。唐辛子が四枚の筵一杯に広げ干されている様が、鮮明に蘇ります。秋の澄んだ空気ゆえ「赫赫」の字も生きてきます。

信号の赤浴びつ、や十三夜 高柳 重信

このようなユニークな「赤」の句もあります。古今無双と讃えられる「十三夜」の月。晩秋の澄み切った白色の月ゆえ、人工の「赤」い光を「浴びつ、」という表現も生きてきます。

紫のもの 紅に 末枯るる 富安 風生

晩秋の季語「末枯」。草葉が上部や先端から枯れてくることで

すが、生気を感じる「紫」から「紅」への変化を詠んだ作品です。澄み切った大気の中の最後の華やきの「紅」が際立ちます。

「黒」を詠み込んだ次の作品も、背景にある大きな「秋」の「白」の世界や透明な世界が、色を際立たせているように思います。

黒揚羽 九月の 樹間透きとほり 飯田 龍太

「樹間透きとほり」は、まさに「九月」に相応しい表現です。「黒揚羽」の「黒」にまで、透明感が及ぶようです。

ぬばたまのくる 髪洗ふ 星祭 高橋淡路女

澄んだ「秋」の星空の下、洗いたての「くる髪」の艶も増すようです。枕詞「ぬばたまの」の効果もいや増すように思います。

秋さぶや 脇侍 欠いたる 黒仏 上田 五千石

「脇侍」の欠けた物語をもつ「黒仏」です。「秋さぶ」は「秋」が深まったもの寂しい気持ちや言う晩秋の季語。深まった秋の透明感ともの寂しさが、仏の「黒さ」を深めているようです。

秋冷の 黒牛に 幹直立す 飯田 龍太

「秋冷」は、「秋」になつて肌には直接覚える冷気、冷ややかさのことです。「秋冷」ゆえの透明感がいよいよ引き立てる「黒牛」の艶。「直立」する「幹」の貫禄との取り合わせが見事です。

風の 盆男 踊りの 黒づくめ 菖蒲 あや

「風の盆」は富山県八尾町に残る盆の行事。「黒づくめ」は「(秋)風」と響き合い、句に落ち着きと統一感をもたらします。

今回は「白」「赤」「黒」を詠み込んだ「秋」の句を鑑賞しました。これらの色は、「秋」という季節の大きさ、もしくはその言葉を持つ「白」や透明な空気をより引き立てるような場面等で多く用いられ、一句の印象を鮮明にするように思います。